

## ムラユ語文献からみたマレー海域世界—「海の民」、「森の民」と「陸の民」の関係について

西尾 寛治

本報告では、15-19世紀のマレー半島に成立した港市国家に焦点をあてた。そして、主にムラユ語文献の分析から、こうした港市国家が、「陸の民」と「海の民」または「森の民」との相互関係の上に存立していたことを、明らかにした。

熱帯雨林と海という生態環境に彩られたマレー半島地域では、一般に19世紀以前の住民は、「海の民」「森の民」「陸の民」の3つに類型化できる。「海の民」とは、漂海民のオラン・ラウト、また17世紀末以降に海賊・海商・戦士として活躍した南スラウェシ出身の移住者ブギスである。「森の民」とは、熱帯雨林で焼畑や狩猟・採集生活を送っていた、いわゆるオラン・アスリであり、「陸の民」は河岸・沿海の低地を居住圏としていたムラユである。マレー半島の港市国家群の国内産輸出交易品は、「海の民」や「森の民」の採集した海産物と森林産物で占められていたと指摘されている。

さて、マレー半島の南部地域に形成されたのは、いずれも東南アジア有数の港市国家(ムラカ、ジョホール、ジョホール・リアウ)であった。これらは、ムラユとオラン・ラウトまたはブギスの相互関係を成立の契機としていた。すなわち、約束または誓約、婚姻連帯によりその相互関係が規定され、「海の民」出身の貴族が、軍事・行政権を掌握していた(ジョホール・リアウの場合は、ブギス副王が軍事・行政・交易を統轄)。これらの港市国家の輸出交易品の採集者は、「森の民」とオラン・ラウトであった。特に後者は「森の民」の採集した森林産物を集荷する役割も果たしていた。

一方、マレー半島の中部・北部地域に形成されたのは、南部地域よりも小規模な港市国家(ペラ、パハン、クダーなど)であった。これらの港市国家群については、「海の民」との関係を示すものは特に見当たらない。そのヒカヤットの叙述や口頭伝承では、むしろムラユの港市支配者と「森の民」との関係が強調されている。例えば、ペラの王権伝承には、「森の民」が港市国家ペラの形成に関与していたことを示唆するものがある。これらの港市国家では、輸出交易品の採集者は「森の民」であり、その集荷者はムラユであったと推定される。

以上のように、「陸の民」ムラユ人支配者の君臨した港市国家の存立を可能としていたのは、「海の民」や「森の民」であった。

## スルー諸島における海民の活動:その持続と変容

床呂 郁哉

当報告はスルー諸島地域における海の民の活動について紹介するものであるその際の主な関心は次のようなものである。

スルー諸島はフィリピン最南部に位置し、パラワン、ミンダナオとボルネオスラウェシ、モルッカを結ぶ線上にある。この地理的位置とその海域に産する豊かな海産物資源によって古くから東南アジアの海域世界の海上交易の拠点として知られてきた。タウスグ、サマ、バジャウなどの名で知られるこの地域の住民はいずれも海上交易や魚撈あるいは「海賊」などいずれも海に依存した生業を営む海の民である。当報告では、歴史的にも西欧側の記録で「海賊」などと記されてきたこれら複数の海の民の活動について報告する。

報告の前半では、現在のスールー諸島における海民の活動様式と民族間関係の原型が編成されたとされる18世紀後半から19世紀前半に到るスールー王国の全盛期について、J. Warrenの研究に依拠しつつその編成過程について検討する。この時期、中国、イギリス人カントリートレーダーを巻き込む形でスールー王国の海産物交易が活性化し、王国のスルタン、ダトゥはこの過程で海産物採集の労働力不足を補うため域外から「奴隷」を略奪するための海賊遠征を組織する。このプロセスでスールー域内のサマ語系海民は「海賊」として動員されることとなった。

その後、今世紀初頭に始まるアメリカによる植民地化を経て、戦後スールーはミンダナオのムスリム居住地域とともにフィリピン共和国の一地方として編入され、かつてのスールー王国の交易圏はフィリピン、マレーシア、インドネシア間の国境で分断されることとなった。しかし国境が引かれて半世紀近く経過した現在においても、スールー諸島の海民の越境的活動は極めて顕著である。当報告の後半においては、この海民活動のうち特に海上交易と「海賊」についてその現在における活動実態を報告するとともに、それがスールー王国時代の海民の活動とどのように連続し、また変化しているのか(持続と変容)という観点から検討を加えてみたい。